

経営指針を実践し続けた 15年

～子どもたちの未来のために…ソノツヅキ～

川上塗装工業株式会社

代表取締役 川上 秀郎 氏

専務取締役 川上 冴華 氏



よい会社をつくろう。よい経営者になろう。よい経営環境をつくろう。

岩手県中小企業家同友会 | <http://www.iwate.doyu.jp/> |

「経営指針を実践し続けた十五年」

子どもたちの未来のために：ソノツツキ

川上塗装工業株式会社

代表取締役

川上 秀郎 氏

専務取締役

川上 冴華 氏



一枚一枚、 薄紙を重ねるように

屋根板金を得意としてきた川上氏は、今から十五年前にたった一人で脚立とトラック一台、パソコン一台で塗装業

をスタートをしました。二〇

〇五年のことでした。最初は大手の塗装会社の下請仕事を中心でしたが、持ち前の明るさとエネルギーで信頼を集め徐々に事業を拡大、社員を迎えるまでになりました。

しかしながら売り上げはどんどん上がりましたが、利益が残らない。どうしてだろうと思い悩みながらいたところに、周囲からのお誘いがあり二〇〇九年、岩手同友会の第五期経営指針を創る会を夫婦で受講することになりました。

当時は仕事の依頼も順調に増えていきましたので現場管理でも、社員への福利厚生にも大盤振る舞いすることもあり、だいたい支出の多い環境下でもありました。経営指針を創る会では、何度も「何のために経営するのか」という問

いかけに、真剣に答えますが、なぜか皆さんの反応はあまり芳しくはありませんでした。

経営指針に真剣に向き合って 経営の軸ができた

川上氏は当時を振り返って話します。「今だから言えますが、その頃は経営について勉強する機会が少なく、勢いでやっていったように思います。『何のために』を真剣に考えて、未来を創造していくことが、本当に大切なことだと思えます。」

指針を創る会では「考える」とことと「経営の軸」のあり方を学ぶことができました。そのうした経緯の中で社員も何人かがやめてしまうことにはなりましたが、残ってくれた三名と一緒に現状を理解することからはじめ、一枚一枚、薄紙を重ねる努力を続け、その後も幸せな未来を創るためにどうすればいいのか。繰り返し繰り返し繰り返し考え、ようやく自分たちが納得のいく経営理念ができたのは、受講後六年が経過してからでした。この十五年の間には自社ビルの購入、新たな部門の創設、新入社員の入社など大きな成長を遂げてきました。



先が見えず 悩み続けた日々

それでも、自分たちが想い描けるような展望が見えず悩んだ日々がありました。「先が見えない未来を目ざすなら、この仕事をやめたほうがいいのではないか」と思ったこともありました。

その一つが、二年間かかったこれからの事業計画の策定時でした。この時が一番苦しかったと川上氏は話します。「毎日、毎日、未来をつくる子どもたちを幸せにするために企業として何ができるのか。どうすればいいのか。ずっと考え続けました。でもそこにはなかなか辿りつけていませんでした。やりたいことが見えず本当に苦しかったです。」

る壁でした。

この子たちに幸せな未来を

展望が見えるきつかけになったのは子どもたちでした。ある日、学童保育に子どもを迎えに行きました。すると娘さんは、汗をかきながら顔を真っ赤にして出てきました。気になり部屋の中に入ると、室温が高いのがすぐにわかりました。エアコンはありませんが、設定温度が定められていることと築年数が経っているため、建物の構造上の問題もあることに気づきました。子どもたちや先生方はここで毎日を過ごしていることを知り「どうにかしてあげたい」と川上氏は思います。

父母会長をしていたこともあり、子どもたちと接する機会が多く、時には自分の名前を呼んで近寄ってくれる子どももいます。また障がいのある子どもさんがいても、子どもたちはまったく違和感なく仲間として一緒に遊んでいます。「壁をつくっているのは自分たちではないのか。」そんな子どもたちから教えられることもたくさんあります。子どもたちの笑顔は、まわりを笑顔にし、パワーをもらえます。

「何か恩返しができないか」と思うようになりました。

真逆の考えから 見えてきた道筋

そこで取り組み始めたのが、建物に塗布するだけで遮熱と断熱をする新素材塗料、ガイナという塗料を使った塗装です。部屋の中からの視点ではなく、外で遮熱する真逆の考え方でした。この素材は、入手が難しく手間のかかる特殊な施工方法であることから、東北ではあまり目向けられませんでした。これを機に東北全体を視野に入れた、第一次特約店にもなりま

した。

無落雪屋根もその真逆な考え方の一つです。東北は雪が多く屋根に雪が積もります。今までの塗装の常識である「屋根から雪を落とす」という考え方から、「雪が落ちない無落雪屋根」にすることを提案し始めました。雪の多い東北では考えられないことです。こうして少しずつ点と点がつながり道筋が見えてきました。川上氏は話します。「考えることをやめたら、気づきもなかったと思います。経営者は考えること、そして謙虚に学び続けることが仕事だと思っています。」

次世代に、ツナギ、 未来へつなぐために

川上塗装工業は現在、新たな事業に向けて動き出しています。二年間考え続けた事業計画が花開きました。新事業は自社ビルの一階を改装しオープンします。「衣食住の省エネ商品や持続可能な考え方を発信する場」にできればと考えています。塗装業の本拠として、そして起業家が集う場として、更に一般の方々が集い発信する場としての機能を整えました。その空間に入ると、喫茶店のような雰囲気の中、ポップな曲が流れています。暖かい色合いの照明が淡く空間を照らし、窓越しには瑞々しい木々の緑が、より空間の居心地を引き出しています。

インタビューには、専務の川上冨華氏も同席戴きました。川上専務は「例えばある方が料理教室を開くことで、食材を提供してくれた企業にもメリットがありますし、来ていただいたお客様にも楽しんでもらえます。更に集客にもつながります。そして何よりもこのスタジオのキッチンを使ってもらうことで我が社のシヨールームにもなります。」

二人三脚で目指す想い

現在進めようとしている新事業の名前は「サステイナスタジオモリオカソノツツキ」です。「ソノツツキ」には、「見て聞いて知り、家に持ち帰り続きは自分たちで決めてほしい」そんな意味が込められており、自分たちの人生の夢が込められています。

「女性の中には、自分自身を認めて欲しい人、一步を踏み出せないでいる人がたくさんいます。またLGBTQやトランスジェンダーで悩んでいる人など、私たちの知らないところで苦しんでいる人たちも沢山います。この場所を通じて、そんな皆さんが『自己実現の場』として、次の世代につないでいってほしい。」そんな想いが込められています。

夢に描いた経営理念の 実現へ向けて

こうした取り組みの大きなエネルギーの一つに、川上社長が昨年十一月に参加した岩手同友会の第六回欧州視察もありました。持続可能な社会への取り組みを実際に体感した川上氏は、その確信を行動

につなげました。

学童保育所の屋根を断熱性能の極めて優れた新塗料ガイナで塗り、子どもたちの快適な環境を守ろうとする取り組み、ホワイトルーフプロジェクトです。ボランティアの方々と無料で塗装し、一〇〇人を笑顔にしようとするプロジェクティブです。実際にボランティアを募集したところ、一般の有志の方の他、地元議会の議員さん、そして今は無職ですが意欲を持って頑張ろうとする若者など、様々な方が参加し、実現することができました。

川上夫妻の夢に描いた経営理念は創業から十五年が経過した今、実現へ向けて着々と動き出しています。

〈経営理念〉

一 私たちは、お客様の宝物を守ると共に、常に新しいことに挑戦します。

一 私たちは、「暮らし続けたい」と思える街を創造し、未来に繋がります。

一 私たちは、社員と共に次世代にとつて憧れになる職業にします。

